

Title	書評: 佐藤典子著 『看護職の社会学』 専修大学出版局、2007年
Sub Title	
Author	平野, 敏政(Hirano, Toshimasa)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008. ) ,p.114- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0114">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0114</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：佐藤 典子著

『看護職の社会学』専修大学出版局、2007 年

平野 敏政

---

「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等女子労働者の福祉の増進に関する法律」が、1985 年（昭和 60 年）に制定されて以来、23 年が経過した。この間、女性の社会進出が進んだといわれている。しかし、半世紀近くが経過した今日においても、専門職、管理職などについては一向に女性の進出が促進されず、男女比に大きな差が存在することは周知の事実となっている。

本書の著者が取り上げる看護職も、男女比に大きな格差が存在する代表的職種といえよう。思うに、われわれが社会生活において見出す格差には、業績的格差と属性的格差があるのではないだろうか。

看護職を取り上げ、看護職はなぜ女の仕事なのか、と問う著者の意図は、おそらくこの間に答えることによって、職業選択における男女間格差という身近な問題に、ひとつの批判的かつ自覚的な認識を作り上げようとするところにあるのではないかと思われる。さらにいえば、業績原理が優位な近代社会において、なぜ女性という属性に帰属される社会的、経済的格差が存在するのかという一般的な女性差別問題とも関連する問への解答のひとつの試みであるように思われる。

本書では、フランスにおける看護職の発展の歴史が取り上げられているが、著者は、わが国の近代医療が、ヨーロッパからの移入によって発展したこと、および、そのヨーロッパでの臨床医学と看護の職業化の典型的な発展過程がフランスに見られることを根拠に、フランスでの看護の社会史の検討が、わが国における看護の職業化と、女性職への偏りへの批判的、自覚的認識にも関連する一定のパースペクティブを与えてくれるものと考えているようである。そして、結論から言えば、著者は自らに貸したこの課題に問題提起的で興味ある解答を提出している。

著者はアミルトン、A.H.、の博士論文と、アミルトンとルニョーの共著になる看護史に関する著書を資料として、フランスにおける看護職の発展の歴史を、看護と女性にまつわる言説の歴史の変遷過程として再構築することを試みている。その中で、著者は、女性に関わる言説がキリスト教的伝統の中で「悪魔に誘惑され、穢れたエバ」と「神の子を宿すことによってエバの罪を清めた聖母マリア」という二重性を持っていたことを指摘している。

そして、看護修道女の存在と関わって、「清らか」、「献身」、「母性」といった言説が看護に転轍されて来た軌跡を跡付けている。まさに、キリスト教的伝統における女性に関する言説の二重性の呪縛こそが、女性自身が自分自らを「清らか」、「献身」、「母性」が転轍された看護へ

と位置づけさせる装置となっていたというのである。

女性、看護、母性の連結は今日では、もはやごく常識的な定説となっているといえよう。その意味ではこのような定式化にほとんど目新しいところを発見することはできない。しかし本書の著者は、ではなぜ、そのような連結が受容されているのかということにまで眼差しを向け、そこに、穢れたエバと献身のマリアという女性をめぐる言説の二重性への女性自身の無意識的な対応と選択というメンタリティーが隠されているのではないかと問いかけている点に、評者は注目したいと思っている。女性言説の二重性という仮説は、確かにヨーロッパにおいては有効であろうが、わが国においてはどうか。

女性言説の二重性仮説に基づいて、看護への女性の埋め込みを明らかにしたとしても、上にみたようにそれは、献身、母性という女性の属性へと転化、編成された属性的格差に基づく説明しか可能にするものではない。

これでは近代における看護と女性の結びつきを説明できないであろう。近代以前の属性的格差の残存と説明してもおそらく不十分である。

業績的原理が優位な近代社会にあって、なぜ、依然として看護職が女性職となっているのか、なぜこのような属性的な格差が、女性自身によってもまた社会的にも受容されているのか、この問題をどのように解けばいいのだろうか。

この課題に著者は、ブルデュー、P.の「ハビ투스」仮説に関連する一連の概念と枠組みを使って答えようとしている。その中で、問題提起的でかつ興味ある論点が展開されている。本書の著者は、ブルデューの dispositions 概念に注目し、フランス語における disposition と dispositions の相違を指摘している。著者の見解によれば、disposition は「配置」を意味し、dispositions は「才能」を意味すると解釈されるという。そして、女性が看護の「場」に位置づけられ続けてきた属性的特性が、その場に「配置」されるがゆえに、その場にふさわしい「才能」が獲得されるという構造的循環によって再生産され、近代社会においても、女性がその能力、才能をもっとも適切に発揮できる業績主義的な遂行の「場」として看護が位置づけられ続けたと結論している。

disposition と dispositions の構造的循環によって属性的格差が、業績的格差に変換され、業績的原理が優位な近代社会においても、看護職における女性への偏重という格差が成立しているとする著者の視点は大きいに興味を惹かれるところである。

近年やや低調なフェミニズム論の中にあつて、本書のごとき慎重かつ冷静な女性をめぐる格差の検討は、新しいパースペクティブの地平を切り開いてくれるものと期待できる。

本書の問題提起と考察をめぐって、多彩な議論の展開を期待したい。

[本体価格 2,730 円]

(ひらの としまさ 慶應義塾大学文学部)